

おばあちゃんが死んだ。

享年八十七歳で大往生だった。最後は眠るように息を引き取ったと母から電話で聞かされた時私は驚くほど冷静だった。大学の後期試験が終わったばかりの二月の寒い日でスマホを握る指先だけがやけに冷たかったのを覚えている。

葬儀は故郷の小さな町で執り行われた。雪がちらつく中、親族が二十人ほど集まっておばあちゃんを焼き場に見送った。私は泣かなかった。正確には泣けなかった。最後に会ったのは去年の夏でその時はまだぴんぴんしていたのに。人間って、こういうふうにあっけなく終わるんだなあ、なんてぼんやり考えていた。

葬儀の三日後、母に頼まれて私はおばあちゃんの家の遺品整理を手伝うことになった。古い日本家屋で築八十年は経っているらしい。廊下を歩くたびにぎしぎし鳴る床板が子どもの頃に遊びに来た記憶を少しずつ呼び覚ました。

「雫、二階の蔵みたいな小部屋、見てくれる？ おばあちゃん、あ

そこに大事なものをしまつてたみたいなの」

母の声にうなずいて私は狭い階段を上がった。ほこりっぽい空気が鼻をつく。突き当たりの小部屋の引き戸をがらと開けると中には古い箆笥といくつかの段ボール箱、それから小さな宝石箱がぽつんと置かれていた。

宝石箱は、子どもの頃にも一度だけ見せてもらったことがある。おばあちゃんは「これはね、雫が大人になったらあげるからね」と言つて、中を見せてはくれなかった。あの時はなんだか秘密めいていてわくわくしたものだ。

今なら見てもいいよね。大人になったし。

私は宝石箱を手にとった。木製で、表面には奇妙な波紋のような模様が彫られている。留め金は錆びていなくてするりと開いた。

中には、指輪がひとつだけ入っていた。

「……わあ」

思わず声が漏れた。シルバーの台座に深い青色の石がはめ込まれ

ている。石は透明で、内側に銀色の光の筋が閉じ込められているみたいにくらきらと揺れていた。アクアマリンだろうか。だとしても、これはちよつと市販品とは思えないほど息をのむほど綺麗だった。

これ、おばあちゃんとの婚約指輪とか？ いや、おじいちゃんは戦争で早くに亡くなったって聞いてるし……じゃあ誰にもらったんだろう。私はためしに左手の薬指に指輪をはめてみた。ぴったりだった。怖いくらいにサイズが合っていた。

「零一、どう？ なにかあった？」

下から母の呼ぶ声がして私は慌てて指輪を外そうとしたが……外れない。

「え？」

もう一度、力を入れて引っ張る。指の関節は通るのになぜか指輪だけが皮膚に吸いつくように留まっている。変だ。さっきまですんなり入ったのに。

なにこれ、指がむくんでるとか？ 入れた時はなんともなかった

のに……

「ちよつと待って、いま行くー」

私はとりあえず叫び返して、指輪をタオルでくるんで隠すようにして階段を下りた。こんなの見られたら勝手に持ち出そうとしたと思われるかもしれない。ていうか、ほんとに外れないんだけど。どういうこと？

その日は結局、指輪は外せないまま、私は実家に帰って自分のアパートに戻った。帰りの電車の中で、スマホのライトで照らしながら指をひねったり石けんをつけたりしたけれど、指輪はまるで私の一部になったみたいにぴったりとはまり続けていた。

まあ、アクセサリーとして悪くないし……とりあえず明日、皮膚科か宝石店に相談しよ……。そう自分に言い聞かせて私はその夜、風呂に入ることにした。

バスルームの湯気の中で私は改めて左手の指輪を見つめた。蛍光灯の下でも青い石は変わらず異様なまでに美しかった。湯船に浸かると、指輪がお湯の中で淡く光ったような気がしたけど気のせいだと思ふことにした。

でも、その直後だった。

「……っ!？」

ふいに、太ももの内側をなにかが撫でた。感触はまるで、ぬるま湯より少し冷たい水の塊が意志を持って動いているみたいだった。

なに？ 水流？ そんなわけない、私じつとしてるのに……。水の手——そうとしか表現できないなにか——は、私の太ももをゆっくりと這い上がり下腹部のあたりで止まった。恐怖で声も出ない。金縛りに遭ったみたいだに身体が動かない。いや、動けないのは怖いからか、それとも本当に身体が言うことをきかないのか。

「な、なに……？」

やっとそれだけ絞り出した時、水の手はするりと私の恥部に触れた。

「ひっ……！」

悲鳴は声にならなかった。水の指……指？ 指と呼んでいいのかこれは、私の割れ目をなぞり、ついにはその先端にある一番敏感な突起を、冷たい感触でくるり♡と撫でた。

え、ちよっと待って、そこ、そこやばいって！ ていうかこれなに!? 透けてる!? お湯が勝手に!?

パニックになる私の耳元で声がした。

「……ようやく、触れられた」

低くてなめらかで、それでいてぞつとするほど冷たい男性の音がすぐ右耳のすぐ横から聞こえた。私は恐怖で硬直したまま必死に首だけを動かして横を見た。

そこには。

「……………え」

男がいた。いや、男、と呼んでいいのかわからない。浴槽のお湯と同じ透明感のある輪郭でゆらゆらと姿を揺らめかせている。長い髪が水の中で漂っていて、深い緑色の瞳が、まっすぐに私を見下ろしていた。

「おばあさまの指輪を受け継いだか。雫、というのか。なるほど、血の匂いがとても良い」

美青年の姿をしたそれがうつすらと笑みを浮かべた。私は頭のどこかで「これ、夢だ」と必死に結論づけようとしていた。だってありえない。お湯が勝手に私のアソコを撫でて透明な裸の美形が風呂に出現とかあるわけない。

しかし、その男は夢などではないというふうに続けて言った。

「私はラース・アクエリアス。水の精霊王だ。お前の祖母、そしてそのまた祖母の代より、お前たちの家系の女と契約を交わしてきた」
「け、契約……？」

「そうだ。指輪はその証。お前がそれを受け継いだということは契

約も更新される。すなわち——お前は今日から、この私の番だ」
は？ 番？ つがい？ 私が？ この透明イケメンの？ 意味わかんない。ていうかちよつと待って、なんで私の股のあいだまだ触ってるんですかこの人の水の手。ていうかさつきからずつとそこ撫でられてるんですけど。

「ちよ、ちよつと待ってください！」

私はようやく声を取り戻して、浴槽のへりにしがみつきながら叫んだ。

「契約とか番とか意味わからないし、そもそもそんなの聞いてないし、おばあちゃんからなんの説明もなかったんですけど！ ていうかそれより、なんで、その、私の、えっと、そんなとこ触ってるんですか！ やめてください！」

ラースと名乗った精霊はきよとんとした顔をした。いや、きよとんて。お前、さっきまであんなドゥみたいな声出してたじゃん。

「なぜと言われても、これは確認だ。お前の身体が契約にふさわし

いかどうか。特に、ここが重要でな」

そう言つて彼は水の指を私のクリトリス、より正確に言つと、その皮をちよつとだけずらして、中身を露出させた。

「ひやつ……!? な、なに……!?」

やばいやばいやばい！ なにこれ、感覚、めっちゃ直に感じるんだけど！ 夢なら夢でいいから早く覚めて！

「ほう。なかなか感覚が良い。形も美しい。これは期待が持てる」
「期待つてなに!? ていうか人の大事な部分を品定めしないで！」
「品定めではない、検分だ。私の伴侶となる器としてお前のそこがどれほど悦びを理解できるかは極めて重要な要素だ」

「やめて！ 話を通じない！ 私はまだそんな契約受けるなんて言つてない！」

「受けるも受けないもない。指輪が外れない時点で、契約はすでに成立している」

「えええ……」

私は左手を見た。指輪は相変わらず石の内側で銀の光をゆらゆらさせながら私の指にぴったりとはまっている。外そうとしてもやっぱり外れない。

「安心しろ。私は精霊だ。すぐにお前をどうしようとは思わない」

「い、いま思いつきりどうこうされてるんですけど！　その水の手！　まだ！　触ってますよね！」

「これは検分だ」

「さっきからそれしか言っていない！」

ていうか検分て。私のクリトリスはお屋敷の蔵かなにかなんです。私はもう泣きそうだった。怖い。意味わかんない。おばあちゃんは何でこんなものを私にくれたんだ。

「……なぜおばあさまは、お前に指輪の真実を教えなかったのだろうな」

レースがふと、少し寂しげな声で言った。

「契約は本来、成人する前に伝えておくべきものだったのだが。それとも、おばあさまはお前に普通の人生を生きてほしかったのか」
「あ、あたりまえでしょ！ 私、普通の大学生だし！ 彼氏もないし！ ていうかそもそも処女だし！ こんな変態精霊と契約するとか聞いてません！」

「変態とは失礼な」

水の手が、ぐっと私のクリトリスを摘まんだ。

「ひゃんっ……♡」

えっ、いま声、めっちゃ変な声出た。

「お前の身体は正直だな」

ラースは笑った。それは優しい笑みでありながらぞっとするほど嗜虐的な色を帯びていた。

「良いだろう。今日はこの辺りで勘弁してやる。ただし」

彼の姿がゆっくりと湯気の中に溶けるように消えていく。

「今夜、夢の中で続きをしましょう。お前が私を拒むというなら、

その身体に教え込んでやらねばならないからな」

「……は？」

声はもう聞こえなかった。水の手も消えていた。浴槽にはただ、いつもと同じぬるま湯とぽかんと口を開けた私だけが残されていた。心臓がばくばく鳴っている。息が荒い。そして下半身には、さっきまで触られていた余韻がじんじんと疼いていて自分でも認めたくないけど——濡れていた。愛液で。

(……ふざけんなああああ!!)

私は心の中で絶叫しながら洗面器のお湯を頭からかぶった。指輪は相変わらず青く輝いていた。

その夜。私はベッドの中でどうにか指輪を外せないかと格闘した後、に諦めて眠りについた。夢の中でラースとやらが出てくるとか言っ

てたけどそんなのは寝なければ回避できる。つまり寝なければいい。
（寝なければ……いい……んだけど……無理……眠い……）
そう思った三秒後には私は意識を手放していた。

気がつくと私は見知らぬ場所に立っていた。いや、立っていたというのは正確じゃない。私は宙に浮いていた。というか、手足が透明な水の鎖で拘束されていて大の字に近い格好で空中に固定されている。

周囲は深い青に満ちていた。水の中にいるようでもあり空気中にも感じる。どこまでも透明で、床も天井も境界があいまいな不思議な空間だった。

「よく眠ったな」

声がして、私はぎよつとして顔を向けた。そこにいたのは、今度

はちゃんと実体のある……いや、どこまで実体かわからないけど少なくとも透明じゃない、ちゃんとした身体つきのラースだった。

彼は裸だった。正確に言うと、水でできた薄布のようなものを腰に巻いているだけであとはもう全部だだ漏れだった。銀色の長い髪がふわりと揺れていて、顔はやっぱり異常なほど整っていた。ていうかちよつと待って、胸筋とか腹筋とか、なんかすごいことになってるんですけど。

いやいやいや、見とれてる場合じゃない！　ていうか裸！　裸だこの精霊！　どこの世界のドレスコードだ！

「ここは我が領域。水の宮殿、と呼ばば良い。お前の深層意識に接続し、こうして対話することが可能だ」

「ど、どうして私、拘束されてるんですか……ていうか服は!?　さっきまでパジャマ着てたはずじゃ!」

服がなかった。パジャマはおろか下着もなかった。私はすっぽんぽんで大の字である。しかも足が微妙に開かされていて、秘部がま

る見え状態だった。ありえない。

「検分の続きだ」

「話の通じない精霊とか聞いたことないんですけど！」

「ここでは誰にも邪魔されない。さあ、始めるとしようか」

彼は近づいてきた。私の正面に立って細くて長い指をゆっくりと持ち上げた。その指先には水滴がふわりと集まっている。

「な、なにを……！」

「まずは、お前の最も淫らな場所が、どれほどの悦びを感じ取れるかを確かめる」

そう言うと、彼の指——今度は水の指ではなく、ちゃんとした肉の指が、私の太ももの内側をそつと撫でた。

「ひっ……！」

「良い反応だ。恐怖と、それから……期待。どちらが勝っていると思う？」

「さ、裂けるわけないでしょ！　こわいだけ！」

「ほう。ではなぜ、ここはこんなに濡れている？」

彼の指がつうつ♡と私の割れ目をなぞった。くちゅり♡と湿った音がして、私は耳まで真っ赤になった。

ちがう、ちがうちがう！　これはさっき風呂で触られたせいで、身体が勝手に……ていうか私のせいじゃない！

「抵抗しても無駄だ。お前の身体の正直な反応が、すべてを物語っている」

ラースは笑った。とても綺麗な顔で、とても意地悪く。

「さあ——見せてみろ。お前が一番淫らな蕾を」

彼の指が私の秘裂をゆっくりと左右に開いた。恥ずかしさで死にそうだった。自分の一番見られたくない場所を、こんな、ほとんど他人みたいな、それどころか人間ですらない相手にじっくりと観察されている。

「ほう」

ラースが感心したような声を出した。

「綺麗なものだな。お前のおまんこは。充血して、ひくひくと震えている。すでに私を求めているのがよくわかる」

「も、求めてません！ それは生理現象です！」

「強がるな」

彼の親指がついに私のクリトリスに触れた。正確には、クリトリスの根本をぐつと押し上げて先端を皮から露出させた。

「ひゃうっ……♡♡♡」

「これが、お前の蕾だ」

彼はわざわざ言葉にして、私にそれを見せつけるようにもう一方の手で指し示した。

「この卑猥な突起だけが、こんなに充血している。私の精を受ける喜びを、すでに身体は知っているのだろう」

「ちが……っ、知らない……！」

「いいや、知っているとも。お前の祖母も、その母も、みな私の精の味を知った。血は記憶する。喜びもまた」

彼の親指が、露出した私のクリトリスをくるくる♡と円を描くように撫で始めた。

「……ッ♡あ♡ああ……♡♡」

声が勝手に出た。自分のものとは思えない甘い吐息みたいな声が唇からこぼれて私はますます恥ずかしくなった。でも、やめてほしいとは言えなかった。というか言おうとしたけど喉がひくついてうまく声にならなかった。

（なにこれ、なにこの感覚……気持ちよすぎて怖い……♡♡♡）

「素直に悦べ。これは私がお前に与える最初の悦びだ。遠慮なく受け取れ」

彼の指の動きが少し速くなった。クリトリスを直接、しかも皮をむいた状態で直に擦られる感覚は自分でしたこともないほど強烈だった。電気が走るみたいな快感がそこから全身に広がっていく。腹の奥がきゆう♡と痛いくらいに締まって勝手に腰が浮こうとした。

「あっ♡や、やめ……♡♡ちが、やめじゃなくて……♡」

（やめじゃなくてなに!?　なんて言えばいいのこれ!）

「やめ、ではない。ではなんだ?　言ってみろ」

彼は意地悪く微笑んで指の動きをぴたりと止めた。

「……え」

絶頂の一步手前で動きを止められて私はぽかんとした。身体の奥がずくんずくんと疼いてもっとと刺激がほしいと悲鳴をあげている。なのに指は動かない。彼は私の反応を楽しむようにじっと見下ろしている。

「い、いじわる……!」

「当然だ。私はお前に悦びを与える代わりに、お前の言葉がほしい」
「ことば……?」

「そうだ。お前が誰に悦びを与えられているのか、ここで何をされているのか——それをきちんと口に出して言え」

……はあああああ!!　なにこの羞恥プレイ!　ていうか私そういうの耐性ゼロなんですけど!

「い、言えるわけ……！」

「ならば、これも止めたままだな」

「そ、そんな……！」

私は唇を噛んだ。身体の奥が疼いて疼いて仕方なかった。あとちよつとでイケる。あとちよつとだったのに。こんなの拷問だ。

「……ご、ごしゅじん、さま」

私は蚊の鳴くような声で言った。

「ご主人様に……私の、淫らな蕾を……もつと、虐めてください……♡♡♡」

最後はもう泣き声だった。恥ずかしさで耳どころか全身が燃えるみたいに熱かった。なに言わされてるんだ私は。バカなの。でも身体がそれを求めているのも事実で理性と欲望が脳内でぐちゃぐちゃに混ざり合っていた。

「よく言えた」

ラースは満足げに微笑んで指の動きを再開した。今度はさつきよ

りさらに激しく、クリトリスを指の腹でぐりぐり♡♡と押し潰すように虐めながら同時にもう一方の手で私の膣口に指を浅く挿し入れた。

「あっ♡♡あああ……ッ♡♡♡♡や♡それ、いっぺんに……♡」

「イケ。私が許可する」

その言葉が引き金だった。

「——ッ♡♡~~~~~っ♡♡♡♡」

頭の中が真っ白になった。視界がちかちかして、身体がびくん♡びくん♡と勝手に勝手に跳ねた。腹の奥が何度か痙攣して自分の愛液が太ももをつたって流れていくのがわかった。声はもう、悲鳴なのか喘ぎなのかわからないものが勝手に出ていて止められなかった。しかも相手は人間じゃなくて、水の精霊。ていうかさっきまで存在すら知らなかった相手。ありえない。ありえなさすぎる。

(……て、ていうか私、いま、すごい顔してるんじゃない……)

朦朧とした意識の中で、私はちらりとラースを見上げた。彼は微

笑んでいた。とても優しい、それでいてぞっとするほど満足げな顔で私のことを見下ろしていた。

「よくできたな、私の雫」

彼はそう言って私の額にそっと口づけをした。唇はひんやりと冷たくて、それなのに触れられた場所がじんわりと熱くなった。

「今夜はこのくらいにしてやろう。だが、明日からは——わかつているな？」

わかつているな、ってなにが……ていうかこれで終わりじゃないの……？

「これはほんの序の口だ。お前の身体はまだまだ未熟だ。これからたっぷり、私の器としてふさわしくなるよう調教してやらねばな」彼の言葉が、遠くなっていく意識の中でこだました。

「楽しみにしている。私の、淫らな小さな蕾」

翌朝。私はアパートの自分のベッドで目を覚ました。パジャマはちゃんと着ている。身体に鎖の痕もない。夢だったのだろうか。そう思いかけて私は左手を見た。指輪は変わらずそこにあった。青い石の中で銀色の光がぐるぐると渦を巻いている。そして、私のパジャマの下は——ぐっしりと濡れていた。夢の中だけでなく現実の身体も反応していた証拠だった。

「……………マジか……………」

私は布団の中で頭を抱えた。

（ていうかこれから毎日、こんなのが続くの……………？ 調教ってなに……………？ ていうか私、昨日あんな言葉言わされたんですけど……………ご主人様って……………しかも蕾って……………！）

枕に顔を埋めて私は羞恥にじたばたした。指輪は相変わらず妖しく輝いていた。

（おばあちゃん……………あなた、孫になんてもの残したの……………？）

心の中でそう突っ込みながらも身体の奥にはまだ昨夜の疼きが残っていて——それが、自分でも認めたくないけど嫌ではなかったことが一番の問題だった。私は深いため息をついてとりあえず下着を替えた。ついでに言うのと、替えたばかりの下着、妙に敏感になっているアソコがこすれるたびにひくひく反応してしまつて非常に困る。

「大学、行かなきゃ……」

講義はまだ続いている。二年後期の単位を落とすわけにはいかない。私はちゃっちゃと着替えてリュックを背負った。指輪は今日も外せなかった。もう諦めの境地である。

アパートを出て駅までの道を歩く。十分くらいの短い距離なんだけど、今日はなんかもうずつと落ち着かない。だってあの精霊昨日なに言つてたっけ。「明日からはわかつているな」とか言つてなかつ

た？　ていうか調教とか言ってたし。今日もなにかされるんだろうか。そう思うだけで心臓がうるさい。私は無意識に左手を右手で隠すように握りしめた。指輪がひんやりと冷たい。

「……別に、日中はなんもできないでしょ。私、起きてるし。夢の中だけの存在なら、現実には干渉できないはず」

自分に言い聞かせるようにつぶやく。そう。そうに違いない。昨夜は夢のなかだったから好き勝手やられたけど、こうして起きている私に水の精霊ごときがなにをできるっていうんだ。そう結論づけた瞬間だった。

「……っ!？」

太ももの内側に冷たい感触が走った。私は立ち止まった。うそでしょ。いまなにか、スカートの中に入った。気のせい、気のせい気はつきりと意思を持った何かみたい私に私の肌の上を這い始めた。

「ちよ、ちよつと……」

小声で抗議する。でも相手は見えない。周囲には通学中の大学生やサラリーマンが歩いている。誰も私の異変に気づいていない。スカートの中で冷たい水の指——絶対にラースのアレだ——が、するすると太ももを上がってきて下着の縁に到達した。

（まってまってまって！　ここ外！　公道！　ていうか人いっぱいいる！）

水の指は私のパニックなどお構いなしに、下着の上から私の秘部をそっとなぞった。

「ん……っ」

小さく声が出た。慌てて口を押さえる。周りの人は私のことなんか見ていない。見ていないけど、もし変な声出して変な顔してたらただの不審者だ。

（このっ……！！　なに考えてんのよあの変態精霊！）

心の中で悪態をついているあいだも水の指は私のアソコの割れ目を布地ごしにゆっくりと往復している。しかも、ただ往復してるだ

けじゃない。ときどきクリトリスのあたりでぐっと押し込むように動くのだ。

「……んんっ♡」

また声が出た。やばい。すごやばい。

（ていうか、これ、下着の上からでもけっこう気持ちいいんだけど……！）

昨夜あれだけ弄られたせいで私のクリトリスはもはや過敏になっている。布越しの間接的な刺激でもじわじわと快感が広がっていく。腹の奥がきゅん♡と疼いて、歩くたびに膝が笑いそうになった。そのとき。

『抵抗しても無駄だ、と言ったはずだが』

頭の中に直接声が響いた。耳から聞こえたんじゃない。脳内にじかにテレパシーみたいな形で届いたのだ。

「ら、ラース……！」

私は思わず声に出してすぐに口を押さえた。やばい、独り言みた

いになった。通行人のおばさんがちらっとこっちを見た。

『そうだ。私はここにいる。指輪を通じて、お前の周囲の水気には常に私の意識が宿る。覚えておけ』

「なにその便利機能……ていうかやめて！　いますごい人通りの多いところなんですけど！」

『知っている。だからこそ面白い』

「サイコパスか！」

また小声で叫んで私は早足で駅に向かった。歩幅を広げると水の指の動きも追従してきてより強くクリトリスを擦り上げる。やめてほしいのにやめてほしくないような、自分でも整理できない感覚が足のあいだでぐちゃぐちゃになっている。

『今日是一日、たっぷり可愛がってやろう。これは調教の一環だ。お前が私を拒めば拒むほど、お前の身体は私の悦びを受け入れるように馴けられていく』

「だ、誰が拒むって……ていうか拒む権利くらいあるでしょ人間に

は！」

『残念ながら、お前はもうただの人間ではない。私の契約者だ』
そう言われて、私は左手の指輪を見た。相変わらず青く輝いている。
これさえなければ、この変態透明男は私に関与できないんだろうか。
でも外れないし。ていうか皮膚にへばりついてるし。

（おばあちゃん……これ、呪いのアイテムじゃん……）

駅に着いて私は電車に乗り込んだ。朝八時台の快速電車はそれなりに混んでいる。座れずに立っている私の周りには、スーツ姿の男性会社員や同じくらしい年頃の大学生らしき男女が立っている。吊り革につかまった瞬間、スカートの中の水の指の動きが活発化した。

「……っ♡」

（ちよ、なんでさっきより積極的になってるの!？）

『混んでいるな。いい状況だ。誰にも気づかれず、お前だけが感じている。この背徳感——心地よいだろう？』

「よくない！」

口のなかだけで反論する。口パクである。隣のサラリーマンが怪訝そうに私をちらつと見た。私は慌ててスマホを取り出しなにか操作してるふりをした。水の指は今度は下着の布地をずらして……ちよつと待って、ずらすの!? そんな器用なことできるの!? 直接、私の秘裂に触れてきた。

「ひ……っ」

やばい。声、いま絶対ちよつと変だった。喉の奥でなんとか殺したけど隣のおじさんがまたこつちを見た。私はひたすらスマホの画面を見つめるふりを続けた。画面はホーム画面でなんの操作もしていない。

『お前のここは、朝からずいぶんと濡れているな。昨夜の余韻か？ それとも、いまの状況に感じているのか？』

（どっちもです！ どっちもだからやめて！）

心の中で絶叫しながら私は必死に平静を装った。でも、下着をずらされて直に触られている感覚は昨夜とはまた違った生々しさがあった。ラースの肉の指ではない、水でできた冷たい指が私の濡れた粘膜の上を滑らかに這い回っている。そしてクリトリスに触れた。

「っ……っ♡」

声が漏れそうになって、私は前のめりになって吊り革を握りしめた。手に汗が滲む。いや、手だけじゃない。太ももの内側も愛液がちよっとずつ垂れてきている。このままだとスカートの裏地が濡れて太もものに張りついてしまう。

『お前の蕾は、朝からこんなに充血しているのか。昨夜あれだけ虐めたのに、まだ足りないかと主張しているようだ』

ラースの声が脳内で響く。その声は優雅で落ち着いているのに言っていることはド変態である。水の指は私のクリトリスをくにくにと揉み始めた。親指と人差し指で摘まむような動きで皮をずらして中の

敏感な先端を直に虐める。

「……っ、あ……♡」

（やばいやばいやばい！　これイくやつ！　電車の中でイくとかやばい！　絶対やばい！）

必死で耐える。膝をがくがくさせながら私は唇を噛みしめて快感に抵抗した。電車が駅に到着するたびに人の流れが変わりそのたびに私は誰かにぶつからないように身を縮める。ぶつかられたら変な声が出てしまうかもしれない。

『なぜ耐える。素直にイけばいいものを』

「そ、れができたら苦労しないんですけど！」

小声である。もはや口パクではない。隣のサラリーマンはイヤホンを置いていて気づいていない。よかった。

『ならば、こうしてやろう』

水の指の動きが変わった。今度は、私のクリトリスにぴったりと吸い付いてそのまま細かく振動し始めた。

「~~~~っ♡♡♡」

声にならない声が喉の奥で爆発した。電車の走行音にかき消されてなんとか外には聞こえなかったはず。でも私はもう限界だった。絶頂が来た。

電車のなかで吊り革につかまっただまま私はいつてしまった。身体がびくんびくん♡と震えて膣が勝手にきゅう♡きゅう♡と収縮するのがわかった。愛液がどばつと溢れて下着とスカートの裏地を濡らしていく。顔が真っ赤になっているのが自分でもわかる。息が荒い。なのに、周りの人は誰も気づいていない。

（いま、私、電車の中でいつた……？ 通学中に……？）

あまりの衝撃に、しばらく呆然としてしまった。水の指は満足したように動きを止めてそのまま私の太ももから離れていった。

『まずは一回目だ』

ラースの声が脳内で静かに響いた。

『今日はまだまだ終わらんぞ、私の雫』

「……じよ、冗談でしょ……」

私は力なく吊り革につかまったまま、目的の駅までの残り二駅をぐったりと過ごした。降りる時、スカートの裏地が太もものに張りついているのがやけに生々しかった。

大学に着いた。講義棟まで歩くあいだ私はずっとびくびくしていた。またいつ水の指が侵入してくるかわからない。ていうかさっき一回目とか言ってたし。絶対またやる気だあいつ……

『当然だ』

「ひいっ」

突然の脳内ボイスに私は小さく飛び上がった。周囲の学生たちがちらっとこっちを見たのを咳払いしてごまかした。

『お前が講義を受けているあいだも、私はお前の蕾を愛で続ける。』

声を出すなよ。他の人間に悟られれば、お前がただの淫乱な女だと思われるぞ』

「誰のせいで淫乱になってると思ってんのよ……」

誰もいない廊下の隅で私は虚空に向かつて悪態をついた。もちろん返事はない。ただ、指輪の青い輝きが一瞬ちかっと瞬いた気がした。

一限目は「日本民俗学特論」である。私の専攻で教授は六十代の穏やかな男性だ。教室には五十人くらいの学生がいる。私はいつも通り中ほどの席に座った。ノートパソコンを開き講義資料をダウンロードする。よし、今日こそ真面目に受講するぞ。さっきまでは散々だったけどこれからは授業に集中――

『では、始めるとしようか』

「……っ」

水の感触がスカートの中に戻ってきた。今度はさっきよりはつきりした形を持っている。まるで本当に誰かの指が入り込んでいるみたいなしっかりした質量感があつた。

（この、タイミングを見計らって……！）

『教授が出席を取り始めたな。返事をするといい』

講義の最初は出席確認である。教授が学生番号を読み上げていく。私は必死に平静を装いながら、水の指が下着の上から私の割れ目をゆっくりと上下に擦るのを耐えた。

「……はい」

自分の番号が呼ばれて、私はなんとか普通の声で返事をした。声、ちよつと震えてなかっただろうか。大丈夫だろうか。

『上出来だ』

ラースが脳内で賞賛する。なにが上出来なのか。ていうかこの精霊、私が恥をかかないかどうかをゲーム感覚で楽しんでるんじゃないだろうか。水の指が今度は下着のなかに潜り込んできた。直に私

の秘裂をくぱりと開く。

（やめ、やめて、まじで、ここ教室……！）

『声を出すなと言ったはずだ』

ラーズの声は冷たいのにどことなく愉悦を帯びている。開かれた私の秘裂のなかで水の指はまず膾口のまわりをぐるりとなぞった。入り口をくすぐるように撫でてそれからすぐ上のクリトリスへと移動する。その動きがあまりにも焦らすようなもので、私は机の下で脚をぎゅっと閉じた。

（脚を閉じてても意味ないんだよなあ、こいつ水だし……）

水は物理的障壁をものもしない。閉じた太もものあいだでも水の指は変わらず私のクリトリスをこねくり回し始めた。

『今日は、もう少し刺激的にしてやろう』

ラーズの言葉と同時に水の感触が変化した。今度はひとつの指ではない。複数の小さな水の粒がそれぞれ意思を持ったみたいに私の秘部周辺に集まってきた。

（なに、なににする気……？）

ひとつの粒はクリトリスに吸い付いた。もうひとつは膣口に浅く侵入した。さらにもうひとつは、なんと私の後ろの穴のまわりをくるくると這い始めた。

「……ッッッ♡♡♡」

あまりのことに私は危うく悲鳴をあげそうになった。喉の奥で必死に押しとどめる。声は出なかったけど代わりに机を蹴ってしまった。ガタンと音がして前の席の女子が振り返った。

「雫、大丈夫？」

「だ、大丈夫、ちょっと脚がしびれて……」

私は笑顔でごまかした。笑顔である。顔はひきつってなかっただろうか。ていうか脚しびれてるところじゃない。水の粒が三箇所同時に私を攻めている。

（あっ♡あっ♡やばい、これやばいやつ、同時に三箇所とか耐えられるわけない……！）

クリトリスを吸い付かれ、膣口を浅くピストンされ、肛門をくすぐられる。それぞれが別々のリズムで動いていて快感が三重奏みたいに重なってくる。頭がどうにかなりそうだった。

私はノートパソコンの画面を必死に見つめた。講義資料の文字が目に入らない。教授の声が遠くに聞こえる。「民俗学における水神信仰の類型分類について——」みたいなことを言っている。いや、いまそれどころじゃない。私のなかでは完全に別種の水神信仰が進行中である。

『どうだ、三箇所同時に責められる感触は』

（どうだじゃない！　ていうか肛門は想定外！　そこまでする!?）
『お前の身体はすべて私のものだ。どこをどうしようとする私の自由だろう』

（暴論！　完全な暴論！）

でも身体は正直だった。三箇所同時の刺激に私の愛液はとめどなく溢れて下着はもはや完全に水没していた。スカートの裏地も濡れ

て椅子の表面にじんわりとシミが広がっているかもしれない。やばい。終わった。帰る時に立ったら椅子が濡れてるやつだ。

『そろそろいくか？』

ラースの声に私は首を振った。振りながらも実際はもう限界だった。クリトリスへの吸い付きが強まって、膣口へのピストンが深くなって、肛門への愛撫がくすぐったさから快感に変わってきている。（これ、イク♡絶対イク♡教室で。講義中に。やばい）

『我慢しないでいい。どうせ誰にも気づかれん』

（気づかれんじやない！ 私の心の問題！）

でも——。心の抵抗もむなしく二度目の絶頂が来た。講義中にある。

「……♡♡♡……♡♡♡」

声は出さなかった。出せたはずがない。でも、机に突っ伏して顔を隠すのが精一杯だった。身体がびくびく♡と震えて膣がきゅう♡きゅう♡♡と痙攣して、愛液がどぷ♡♡♡と溢れた。椅子の上に

小さな水たまりができている感触があった。もう終わった。履いているスカートごと終わった。

頭を伏せている私に前の席の女子がまた振り返った。

「雫、ほんとに大丈夫？　なんか顔赤いよ」

「ちよつと……貧血、かも……」

私はうつ伏せたまま答えた。声はかすれていた。ていうか貧血で。もっとマシな言い訳なかったのか私。教授も気づいたらしい。講義を中断して私のほうを見た。

「大丈夫ですか？　保健室に行きますか？」

「い、いえ、大丈夫です、すみません、ちよつと水分とれば……」

私は顔を上げて必死に笑顔を作った。教授はちよつと心配そうだったけど講義を再開した。水分で。いま私、水分なら別の形で死ぬほど補給されてるんですけど……。

『講義中に三度イくのはどうだ？』

「結構です！」

小声でぴしやりと言った。隣の席の男子がぎょつとした顔でこっちを見た。私は慌ててまたノートパソコンに向き直った。

『冗談だ。ひとまず、この講義が終わるまでは休ませてやろう』
水の感触がずっと引いていった。私は信じられない思いで自分の股間に意識を集中した。ほんとにいなくなってる。……終わった？
『ただし、昼休みには続きをしましょう。楽しみにしていろ』